

干支学における時間・気・生命—道教星占体系と『黄帝内経』運氣論の関係考察

廖 維 駿

Time, Qi, and Life in the Ganzhi System: A Relational Study of Daoist Astrology and the *Huangdi Neijing* Yunqi Theory

Liao Wei Jun

Abstract

This paper provides a preliminary study of the relationship between the ancient Chinese Ganzhi (Stem-Branch) system, Daoist astrology, and the *Huangdi Neijing*'s Yunqi theory. Originating from early observations of seasonal change and plant growth, the Ganzhi system developed from divinatory practice into a cosmological framework linking time, space, and qi. This framework later shaped Daoist astrological methods, which correlate celestial movements, temporal cycles, and human destiny.

Meanwhile, the *Huangdi Neijing* adopted the same Ganzhi-based logic to explain physiological rhythms, seasonal disorders, and the interaction between internal organs and environmental qi. By examining their shared cosmological principles, this study argues that Ganzhi cosmology, Daoist astrology, and medical *Yunqi theory* represent interconnected expressions of the ancient Chinese ideal of harmony between Heaven and Humanity. The paper thus aims to lay a foundation for future interdisciplinary research on the combined evolution of astrology, medicine, and Daoist thought.

キーワード：干支学、道教占星術、『黄帝内経』運氣論、陰陽五行・気

key words : Ganzhi Cosmology (Stem-Branch System), Daoist Astrology, Huangdi Neijing *Yunqi* Theory, Yin-Yang and Five Phases • Qi

はじめに

本研究は、中国古代における干支体系が道教星占術および『黄帝内経』運氣論の思想的基盤としてどのように形成され、発展してきたのかを考察するものである。干支は、季節循環や植物生態の観察から生まれた時間表象であり、上古より暦法・卜占・祭儀に用いられてきた。先秦から漢代にかけて、干支体系は陰陽五行説と結合し、天文・気象・人体生理を統合する宇宙論的枠組へと成長し、道教形成において中心的役割を果たした。この枠組は星辰運行、厄除、養生、医薬など多領域に浸透し、「天人合一」思想の実践的形式として受容された。

しかし近年の研究動向を見ると、干支学・道教

占星術・道教医学の三領域を統合的に論じる研究は依然として乏しい。特に近代以降、四柱推命と『黄帝内経』運氣論を関連づける研究が主流であり、星占体系から運氣論へアプローチする研究はほぼ見られない。この点は学術的空白であり、本研究が取り組むべき課題である。また、干支体系が生み出す「時間—気—生命」の思想構造が、道教の生命観（重生・貴生・養生・護生）といかに結びつき、中華宗教文化の根幹として継承されたかについても、十分な検討が行われていない。

筆者は、干支学（十干十二支）が生命循環と祭祀の二システムを中心に機能し、巫女文化から宗教文化へ転換する過程で、天文星占術および医学

山梨県立大学 国際政策学部 国際コミュニケーション学科

Department of International Studies and Communications, Faculty of Glocal Policy Management and Communications, Yamanashi Prefectural University

的気論に応用されていった点に注目する。干支が示す自然観・生命観は、道教における星占術や医療理論の形成過程と密接に関係し、吉凶占断、厄除、養生など生活実践に広く影響を及ぼした。道教は道家の重生・貴生・養生・護生の思想を継承し、科儀・方技・功法・術数・医薬を包摂する生命重視の宗教体系を形成したが、その基層には干支体系による「時空一気一生命」の連関構造が存在する。

また、干支学は唐末五代以降、韓国や日本へ伝播し、生活文化や宗教実践に長期的影響を及ぼしてきた。近現代においては、戦後の台湾への文献移入と研究者交流により、干支・易・方術・道教文化が再活性化され、多様な伝統知の保存と再解釈が進んでいる。にもかかわらず、干支学と道教文化の関係性を体系的に整理し直す試みは、学界全体としてまだ十分とはいえない。

本研究の目的は、干支体系を中心軸とし、道教星占術と『黄帝内経』運氣論の関係構造を明らかにすることである。両者が共有する天人合一思想の働き、および干支が時間論・気論・生命論を貫く総合的知識体系として機能する点を解明し、干支学を軸とした道教思想・中医運氣学・占術体系の連関モデルを提示することを目指す。これにより、従来の四柱推命中心の研究を超え、星占術を媒介として道教医学に新たな理論的接続を与える基盤を構築することが可能となる。

中国の先人たちは、寒さの中と暑さの中で、春に耕し、秋に収穫し、日の出時に作業を始め、日没時に眠るという生活実践の中で、歴代の生活環境で自然現象に対する観察と体験を経て、天地と人間の連動関係を徐々に感じてきて、干支学（十干と十二支）の概念は先人が自然の植物の生態に対する認識から生み出し、さらに天、地、人との関係を結びつける「気」の概念を作り出した。宋の時代の章如愚（1196-1248）は『群書考索』で十干と十二支の序列を植物の成長周期として説明した。干という字は秆、竿、杆と同義で、干、干、干に通じる。支は肢、枝と同義で、『三命通会』論支干源流は「夫干猶木之干、強而為陽；支猶木之枝、弱而為陰。」¹⁾ 乾、幹、榦という字の昔の形

は太陽に囲む植物であり、最初の時間を測る道具と解釈し、四字熟語「日上三竿」はそれを表現している。

古人は蓍萩によって占いを行い、日月の満ち欠け、大地、星辰の記号として記録するのに用いたため、「天皇氏が干支を作り、伏羲氏が甲曆を作り、黄帝が大桡を甲子にする」という説が生まれた。これが干支学の起源伝説である。干支学はいわゆる十干と十二支であり、干支を使って年を編成するのは中国古代の特有な方式であり、その起源と創始者については昔から論争があり、ここでは現代の甲骨文学者の研究と『史記』律書、『漢書』律曆志、『説文』、『釈名』の史料記録を合わせて考察することによって、干支学と年、月、日、時の対応関係を明確に知ることができる。干支は万物の生息システムを構築し、参照する物は地上の草、木である。草、木は12カ月間に命を育み、芽生え、成長、成熟、枯れ、死亡、種子が大地に帰るのは、地支システムを構築する上での重要な根拠である。²⁾ 現在の文献資料によると、最初に干支を記載したのは安陽殷墟から出土した甲骨文中で、はじめは干支でそれぞれ数えと順番付けをするが、その後両者を合わせて、2つの具体的な物事で抽象的な意味を表し、それが時間を計ることである。³⁾ 中国古代の曆では、甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸は「十干」と呼ばれ、子、丑、寅、卯、辰、巳、午、未、申、酉、戌、亥は「十二支」と呼ばれ、両者は決まった順序で組み合わせ、干支記法を構成した。『礼記』曲礼によると、「六十曰耆、指使。」⁴⁾ という。六十はちょうど干支が互いに組み合わせで作った年を記録する周期である。⁵⁾ 干支で年を記録するのは十進法と六十進法を結合し、循環し、繰り返す、中国古代特有の時間を記録する方法であり、中華の優れた伝統文化の中で重要な一部でもある。

大昔の人は干支を担体とし、十干は天の理、十二支は地の理を担っていた。「在天成象、在地成形、在人成運。」天の理と地の理は人間の理に影響を与えているので、古人は天、地、人間、事の運に合うために十干と十二支を作り出した。天、地は場所を定め、干支は時空を定め、時空は世界

を定める。十干は天時を表し、十二支は万物を象徴し、自然に栄枯盛衰は天と地の影響と制約を受けている。前文に説明した十干と十二支の組み合わせは「六十甲子」を形成し、「六十甲子」を用いて天、地、人との間の時間と空間の関係を述べる。干支は、応用易学が実際に利用される時の重要な手段と方法でもあり、多くの物事の法則はそれを通じて認識しなければならない。

商の時代にすでに十干と十二支を空間及び時間に利用する習慣があり、時間的には年、季節、月、日の概念があり、例えば『甲骨文合集』では時間に関する内容に言及した：「庚申卜、出貞、今歲蝗不至茲商。二月。」⁶⁾「庚寅卜、賓貞、今春王其歩伐人。」⁷⁾「在九月、王征人方。」⁸⁾「王占曰、有崇。八日庚戌有各云自東、宦母。昃、亦有出虹自北、飲於河。」⁹⁾また、「其自西来雨。其自東来雨。其自北来雨。其自南来雨。」¹⁰⁾「己巳王卜貞、今歲商受年。王占曰、吉。東土受年。南土受年。吉。西土受年。吉。北土受年。吉。」¹¹⁾「丁酉、貞、王作三師右中左。¹²⁾王立於上。」¹³⁾「其豊在下、北饗。」¹⁴⁾など空間に関する内容もある。上記の卜占の記録の分析から、甲骨文ではすでに方向の概念、つまり「上、下、右、左、中、北、西、南、東」などの方位と概念を明確に示していることがわかる。

干支はまず天文学で時間を図るのに応用される。中国の伝統的な暦である太陰暦（夏暦）から見ると、干支で年月日を編成し、寅から正月を始め、正月を春とするため、「斗柄回寅万戸春」という説がある。「甲子」や「乙丑」……などを言うが、それは十干の十種の文字と十二支の十二種の文字を、十干の一つ目の文字に十二支の一つ目の文字、十干の二つ目の文字に十二支の二つ目の文字の順に並べて得たものだ。十干の十字の順序は「甲乙丙丁戊己庚辛壬癸」、十二支の十二支の順序は「子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥」、甲と子から始まり、癸と亥まで順番に合わせ、繰り返して60の組み合わせを行い、それを「六十花甲」と呼ばれる。中国では六十花甲を使って年月日を循環的に記し、特に紀年法として最もよく使われ、暦法も古代の時間を記すのに重要な道具の一つである。

（一）干支と道、気

秦が統一する以前の時代の諸子の中で、道は諸子百家の理論の核心である。道は本源を指し、昔から変わることなく根本的な存在である。「道」のこういう意味は、その合理的な解釈は天道から抽出したのにしかできない。天道とは最初は天体、つまり太陽、月、星の運行軌道のことを指す。『馬王堆帛書』によると、「天道環周」。¹⁵⁾天体の諸象の中で、日、月と人々の生活関係は最も密接で、その運行の規則性も最も顕著で、故に古人は一日中の太陽の運行状況によって十干を作り出し、太陽の昇降と循環を代表し、また、12ヶ月の万物成長の関係に基づいて十二支をまとめ、万物の生命循環を代表している。干支自体は形成システムでありながら、時間と空間の概念も持っており、天地、日月も代表するので、干支で時間を表記するのはとても適切である。

『老子』四十二章に、「道生一、一生二、二生三、三生万物。」¹⁶⁾とあり、道は宇宙の原始の状態、太易、太初、太始などの名称にも呼ばれ、気の始まりである。道生一は道から気を生まれ、それが太極である。万物は陰を負い、陽を抱き、太極循環で一生二、陰陽の二気を生まれ、それによってまた三を生まれ、故に天、地、人の関係があった。人間は知恵を利用して天地の中で木、火、土、金、水の五行を体験し、陰陽媾合、五行融合し、そして万物を生み出し、さらに絶えず循環する。『太極図説』には、「二気交感、化生万物」¹⁷⁾とある。万物の根源は気、人間は気によって形成する。西漢の董仲舒（紀元前176年～紀元前104年頃）は『春秋繁露』玉英で、「元者、為万物之本、……乃在乎天地之前。」¹⁸⁾と述べ、気は万物の根源と指摘した。¹⁹⁾前述の干支が時間を表記する方法であることのほかに、本研究では、干支も「気」の概念一つであることを提案する。気は、天人合一と天人融合の観念の中で天地と万物と連絡する媒介であり、具体的に言えば、それは人と天地が時間と空間の中で構築した連絡と筋道であり、中国の先人はそれを記号で表すことによって、十干と十二支を生み出した。

『黄帝内経素問』宝命全角論によると、「人以天地

之氣生、四時之法成。」「天地合氣、命之曰人。」²⁰⁾ という。これは人間と気の関係であり、気に対する認識と探求でもある。気が存在が天、地、人間との繋がりになるので、四季の変化が人体の生理の循環にも影響を与えている。『黄帝内経靈樞』歳露によると、「人与天地相參也、与日月相応也。」²¹⁾ という。天地には季節の変化という物事の法則があり、人には生、老、病、死という生命の変化があり、天、地、人と物事の間には緊密につながっており、これらの現象はすべて気を通じて伝導されている。²²⁾ 干支は、中国の先人が「気」というシステムから派生した伝達の記号である。

干支は我が国の古代の先人が物事と現象に対する観察を通じて、自然の万物、万象を陰陽に分けて、陰陽二気の運行によってすべての物事が形成、発展、変化をすると考え、自然の陰陽変化の法則を総括して、これは対立と統一の哲学思想である。例えば、生と死、寒と暑、男と女、剛と柔、多と少、正と負……さらに植物の葉にも表と裏がある。干支を陽干陽支、陰干陰支に分ける。干支の順に並べて、単数に位置するのは陽干陽支、偶数に位置するのは陰干陰支であり、それによって誕生した万象を網羅し、万物の相生相克、対立統一の弁証法、陰陽説などが徐々に各科学分野に応用されている。干支は先人が宇宙、時空に対する観念の中で方位、物事、属性、季節を表すのに使われている。例えば、甲乙寅卯は東を表し、五行は木、春を表す。丙丁巳午は南、五行は火、夏を表す。庚辛申酉は西、五行は金、秋を表す。壬癸子丑は北、五行は水、冬を表す。戊己は中央、辰戌丑未五行は土を表し、四季の末月であり、これらは古代天文暦法と星占い術にとって必要な部分である。

本文で議論している天文、星占い、暦法はすべて先秦時代の陰陽学と関わっている。春秋戦国の時代、諸子百家を生み出した背景には、1つは詩、書、礼、楽を準繩とする儒、墨、法などの学で、上層社会で支配階級と緊密に結合し、もう1つは天文暦法、星占い術と民間信仰などの実用技術を主とする陰陽学、方技学と道家の無為哲学表現で、民間では堅固な基礎を持っている。秦漢以来、さらに簡略化されて儒教と道教の二大のシステムに分

かれており、この2つは中国文化の中にはなくてはならぬ基本的思想として、中国の伝統文化の中での主流的な思想である。漢の時代になってから天文暦法、星占い術と道家思想が道教体系に溶け込み、あらゆる面で道教に影響し、かけがえのない存在となり、道教の民間での伝播にもさらに魅力を持たせた。²³⁾

(二) 干支と道教占星術

中国古代の天文学及び星占いシステムの継承と云えば道教の天文学思想をぬいては話にならず、道教の天文学思想も中国古代の天文学システムまで遡らなければならない。道教は後漢以降徐々に形成され、道家思想に基づいて道教の中心の教義に転化し、さらに他の主要教派、例えば黄老思想、方仙道及びその他の民間信仰の方技をまとめることによって、完全な道教のイメージが現れ、そして書物を出版し、徐々に経書の方式で上下階層の人に教義を浸透し、信者を吸収する。経書の意図は道教の神聖的な地位を固めるほか、中には星占い、厄除け、丹薬を練る及び医薬養生などの知識、技術も多く、当時では実用性が極めて高く、一般人の生活にとっては知識の宝庫と言っても過言ではないため、多くの信者から支持されていた。道教の発展は魏晋南北朝から唐末北宋時代にかけて頂点に達し、ちょうど仏教が東から中国に伝わってきて発展する時点も同じ時期なので、当時道教と仏教の対話が激しかった。先行研究の資料によると、唐末前後の時期の多くの仏、道經典の中で、厄除け、祈願、星占い内容は互いに模倣したりするきらいがあり、当時の仏道教が互いに競争していたことが分かり、教義の宣伝と普及にはこれらの知識と技術を用いて一般人の生活上の悩みを解決することもよくある。²⁴⁾

道教は星斗信仰、神仙の系譜及び組織管理の構築において一定の天文知識を身につけなければならない。例えば、科儀と祭祀の場所の設計や道士の礼拝の動作など、全部一定の天文知識を用いてこそできるものである。中世の天師道（道教の流派の一つ）も二十四節気や二十八宿などの天文知識を用いて二十四治（布教の場所）、二十八治（布

教の場所)の教区システムを設置した。『雲笈七籤』卷二十八には、「張天師二十四治図云、太上以漢建安二年正月七日中時下二十四治、上八治、中八治、下八治、応二十四気、合二十八宿、付天師張道陵奉行布化。」²⁵⁾とある。道教はまた星を図形や記号とし、北斗七星を七星旗と道士が妖魔を退治する法器にし、例えば七星宝剣や令牌(壇場法器)など、陰陽太極図と同様に道教を弁別するのに重要な標識である。²⁶⁾ 道教の経典によると、道士たちが鬼神を召喚するために用いた呪文は、天象星斗雲気が自然に形成した「天文」と関係があり、昔の人は天には日・月・星、地には山と川があり、「符者、通取云物星辰之勢」²⁷⁾と考えていた。呪文の文字は混沌から由来しているため、天文を模して描かれた魔除けの呪文には天の力が宿っていることになり、呪文、法器や科儀は道士たちが民衆の厄除けのために祈り、魔除けによる病気の治療に有効な心理治療モデルとなっている。

『道蔵』には、天象、易学、星占い、暦法、風水、命理、医薬などに関する古典がたくさんあり、例えば、『通占象曆星経』『盤天経』『秤星霊台秘要経』『皇極経世』『黄帝素問霊枢集注』『六十甲子本命元辰曆』『儒門崇理折衷堪輿完考録』『易数鉤隠図』『紫微斗数』『黄帝金箱玉衡経』『黄帝宅経』など……数十部の経典がある。上述の経典は、基本要素であれ演算方式であれ、干支学と深くかかわっている。十干、十二支の分類と結合は時間と空間条件の分析によるものである。商代までの千年の歴史の流れの中で、干支学は配列記数、卜占、暦法などから徐々に変化し、空間と時間的な演算公式に形成され、干支学の構造から人類の運命が天、地で構成された空間と時間などの要素の中で重要な役割を持っていることが分かり、これは古人が天人合一、宇宙と人類の繋がりも観念の濫觴である。『周易』が完成した後、老子や孔孟などの聖人はすでに道は万物の母であり、陰陽と化して天地万物を生むことをはっきりと認識した。しかし、この化生の過程は古聖先賢がはっきりと説明していないと筆者は思い、それによって後世の学者たちが「道」の問題について多くの異なる見解を持ち、近代西洋の科学が発展して初めて比較

的明確な答えがあったわけである。が、それは科学的な答えであって、中国哲学にはまだ不足しているところがある。

例えば、干支が命術に借用された場合、まず考慮しなければならない枠組みは時間と空間要素である。前文に述べたように天支学は殷商時代に空間と時間の上での使用習慣があり、時間には年、月、日、時があり、空間には方位と五行などがあり、天地があれば陰陽になるので、十干と十二支は陰陽、五行、方位、時間などの条件の下で初歩的な演算のシステムを形成し、そして、人の生年月日をこのシステムにはめると、天、地、人は繋がることできる。古人はこの演算のシステムを通じて人類の運命法則とメカニズムを見つけ出すことを期待しているため、一人一人が生まれた時点と同じフレームに設定し、このフレームは「道」の投射であり、天地が一人一人に与えた「気」を考察することが目的であり、異なる気は人に異なる人生を与えるので、「天地」あるいは「道」は人に異なる先天的な特質を与えるわけである。後世の命術師たちは、干支の属相、四季の節気、人体の臓腑……などの条件を次々とこの演算のシステムに組み込んできたため、一人の人間がこの世界に生まれてきたと同時に、空間と時間の意味を同時に持つようになる。次に、演算過程においても出生者の方位、地理位置、時代背景、家庭などの要素を考慮することによって、その環境の利害、吉凶を演算し、さらに干支の属相、人間関係、空間方位または行動パターンなどの作法から吉に向かって凶を避ける調整を行わなければならない。²⁸⁾

命術において干支学の応用は2つのシステムに分けられ、四柱推命はその1つであり、もう一つは星占術である。この2つ命術は近代ではすべて「禄命術」になり、簡単に言えば占いの道具になったのである。四柱推命が成熟したのは北宋初年で、陰陽五行の関係に基づいて人の吉凶禍福を読み取る。一方、星占術は戦国に起源し、唐末五代に成熟し、干支のほか、大六壬、陰陽五行、曜星などの要素を合わせ、その組み合わせの具合は四柱推命より繁雑である。星占術は最初は王権に奉仕していたが、唐末になってからだんだん民間に移っ

て一般の人が使える命術になった。近年、多くの学者が四柱推命を用いて『黄帝内経』の運論と合わせて予防医学を検討しているが、誰も星占術の角度から切り込んで検討していない。筆者は最も主な原因は2つあると考えている：まず、『黄帝内経』で述べた干支理論、陰陽五行と天人合一の思想は明らかに四柱推命と連結することができ、多くの易者と医者は四柱推命に対してよく知っている。これも考慮して、筆者は四柱推命と『黄帝内経』の研究方式とは異なり、星占術と『黄帝内経』を結合して予防医学を検討してみようと思ひ、より多くの手がかりと価値を発掘できるかもしれないと考えている。

伝統学界は中国古代文化の発展に対して純粋な儒学の人文教育が主流だと考えがちであり、いわゆる「子不語、怪力乱神。」と歴史的に位置づけられた道家も末座に付き添うことになり、他の学説流派なら言うまでもない。しかし、近年の考古学の新たな発見に伴い、中国文化にはもう一つの手がかりが存在していることが分かり、それは占星術、医学方技に関する文化であり、その根源は原始的な思考、陰陽家と道家、そして道教文化にある。中国古代の天文科学技術史の研究については、術数と方技が重要な一環である。前に官学と諸子百家の分類問題に言及したことがあり、術数は典冊及び祝（祭祀する役）、宗（世代を管理する役）、卜（占いをする役）、史（記録する役）に属し、天文、暦算、地理、風水などに関連し、方技は養生、医薬知識及び調理技術システムに属し、医薬、養生、製錬調理、動植物学、房中術などに関連する。術数と方技には中国古代の自然科学の基礎が含まれているほか、工芸、農業、軍事技術の発展にも影響を与えているが、これらの中国古代の技術の多くは現代では「迷信」とされているものである。民間宗教と信仰のほか、これらのいわゆる迷信的な事物の多くは道教に保存されており、明代以降の『道蔵』システムは非常に貴重で研究、探索に値する。中国の道教は術数と方技を自分の知識体系とするだけでなく、道家の老荘思想を哲学的な表現とし、文化面からも技術面からも、道教は中国の数千年の文化と伝承を含んでいる。²⁹⁾

(三) 干支と道教医学

干支が道教医学に用いられる最も代表的な経典は『黄帝内経』である。十干と十二支はそれぞれ内在的な繋がりのある統一体で、大昔は最初に使い分けていたが、次第に合流していった。十干は甲から癸まで、まず周期的循環の陰陽消長を表し、次に五方位を表し、東、西、南、北、中、再び示したのは五時節、春、夏、長夏、秋、冬である。五行家というのは十干の中でははっきりと解釈できるもののことである。十二支は子から亥まで、まず円周上の異なる方角を示し、次に年に12ヶ月があることを示している。再び示すのは陰陽消長の周期のうち12期間である。この十干と十二支の要領は『黄帝内経』で使われているのは同じ概念である。³⁰⁾

『黄帝内経』では、干支を時間、方位、人体部位及び陰陽五行説などに合わせて医学的現象を説明し、例えば『黄帝内経素問』・天元紀大論では、「甲己之歳、土運統之、乙庚之歳、金運統之、丙辛之歳、水運統之、丁壬之歳、木運統之、戊癸之歳、火運統之。」³¹⁾ という紀年の記述を見ることができる。例えば「甲己之歳、土運統之」とは、甲から癸までの10年のうち、甲年、己年につけ土運の年になることである。『黄帝内経素問』汚気法時論では、五行相生相克の理を用いて、五臓病の厳しさ、予後及びいつまで生きられることなどを試算することができる。いわゆる「肝病者、愈在丙丁、丙丁不愈、加於庚辛、庚辛不死、持於壬癸、起於甲乙……心病者、愈在戊己、戊己不愈、加於壬癸、壬癸不死、持於甲乙、起於丙丁……脾病者、愈在庚辛、庚辛不愈、加於甲乙、甲乙不死、持於丙丁、起於戊己。」……など。さらに干支学と占星術を結合し、十干と二十八宿を組み合わせ、時空方位が対応している医学の理論を述べ、『黄帝内経素問』五運行大論によると、「臣覽『太史天元册』文、丹天之氣経於牛女戊分、形天之氣経於心尾己分、蒼天之氣経於危室柳鬼、素天之氣経於亢氏昂畢、玄天之氣経於張翼婁胃。所謂戊己分者、奎壁角転、則天地之門戸也。」とある。上述の「牛女心尾危室柳鬼亢氏昂畢張翼婁胃奎壁……」は、二十八宿の名前で、戊己二字は十干、八卦は方位を表し、戊己

は土、土は四つの方位を主導し、翼は東南角、乾は西北角である。故に「戊己分者、奎壁角転」と言う。己分、すなわち東南、戊分、すなわち西北である。³²⁾

『黄帝内経靈枢』陰陽系日月にも、「寅者、正月之生陽也、主左足之少陽、未者、六月、主右足之少陽、卯者、二月、主左足之太陽、午者、五月、主右足之太陽、辰者、三月、主左足之陽明。」という経文の十二支は、月を記し、そして足の十二経脈と組み合わせるのに用いる。『黄帝内経靈枢』衛氣行によると、「歳有十二月、日有十二辰、子午為経、卯酉為緯。」とある。十二辰は十二時という意味で、午は南方に、子は北方に、北南は縦を意味するため、経と呼ばれている。酉は西方、卯は東方、西東は横であるため、緯と呼ばれている。これは十二支で時を記し、方位を表すということである。『黄帝内経靈枢』歳露によると、「二月丑不風、民多心腹病。三月戊不温、民多寒热。四月巳不暑、民多痒病。十月申不寒、民多暴死。」これは十二支で病理現象の日付の例である。『黄帝内経素問』天元紀大論によると、「子午之歳、上見少陰、丑未之歳、上見太陰、寅申之歳、上見少陽。卯酉之歳、上見陽明。……」この経文中の十二支は年を記すために用いられている。『黄帝内経素問』六微旨大論によると、「木運臨卯、火運臨午、土運臨四季、金運臨酉、水運臨子所謂歳会、氣之平也。」これも十二支で年を記すもので、論述しているのは運氣学の中の「歳会」（歳運と歳支での五行属性が同じの場合）である。³³⁾

『黄帝内経靈枢』陰陽系日月にも陰陽五行の結合応用が記載されている。「甲主左手之少陽、己主右手之少陽。……辛主右手之太陰、壬主左手之太陰。」これは十干での日付が陰陽学説と結合して経脈を解析するのである。『黄帝内経靈枢』陰陽系日月にも、「寅者、正月之生陽也、主左足之少陽。未者六月、主右足之少陽。……戌者九月、主右足之厥陰。亥者十月、主左足之厥陰。此两陰交尽、故曰厥陰。」これは十二支で月を記すのが陰陽学説と結合して足の経脈と脈の症状のメカニズムを解析する部分である。また、『黄帝内経素問』脈解に、「太陽所謂腫腰膝痛者、正月太陽寅、寅、

太陽也、正月陽氣出在上、而陰氣盛、陽未得自次也、故腫腰膝痛也。」がある。これは十二支に対応する月と陰陽の特徴で経脈病証のメカニズムに応用される部分である。³⁴⁾

中華医学は中華文明の中で非常に特殊な学問であり、誕生から天文、干支、陰陽五行などの要素と様々な関わりがある。私たちは『黄帝内経』の中から人体の内外が干支、五行に組み入れられた記録を見ることができ、例えば十干と体の組み合わせ：甲は首、乙は肩、丙は額、丁は齒、戊己は鼻と顔、庚は筋、辛は胸、壬は脛、癸は足。十干と臓腑の組み合わせ：甲は胆、乙は肝、丙は小腸、丁は心、戊は胃、己は脾、庚は大腸、辛は肺、壬は膀胱、癸は腎。十二支と臓腑の組み合わせ：子は膀胱、丑は未脾、寅は胆、卯は肝、辰は戌胃、巳は心、午は小腸、申は大腸、酉は肺、亥は腎。五行での分類：干支は木の場合は胆肝、火の場合は小腸と心、金の場合は大腸と肺、水の場合は膀胱腎、土の場合は脾胃である。³⁵⁾ 病理、生理、投薬及び予後に関する論述するあり、例えば『黄帝内経素問』歳氣法時論によると、「肝主春、足厥陰、少陽主治、其日甲乙、肝苦急、急食甘以緩之。」という。また、病氣理論の「五臟風」（内臓システムの相互作用に関わる事情で病気になること）形成について説明があり、例えば『黄帝内経素問』風論によると、「以春甲乙傷於風者為肝風……以冬壬癸中於邪者為腎風。」という。予後の推定に関する記録は『黄帝内経素問』平人氣象論に、「肝見庚辛死……腎見戊己死、是謂真臟見皆死。」とある。人体の五臓と十干、五行の属性に対応しており、もし「真臟脈」（病が大変厳しい時の脈）が相克の十干の日に現れた場合、病状はひどくなる恐れがあり、死亡することもある。病理と投薬にも多くの例があり、例えば『黄帝内経素問』腹中論には、「芳草之氣美、石藥之氣悍、二者其氣急疾堅勁、……夫熱氣慄悍、藥氣亦然、二者相遇、恐内傷脾、脾者土也而惡木、服此藥者、至甲乙日更論。」と記載されている。熱、のぼせるの患者は「芳草、石藥」などの処方箋を服用してはならないという。

おわりに

もちろん、『黄帝内経』における記述はそれだけではなく、十干と五行が組み合わせ、転化することで五運を論述し、十二支紀年が結合し五行になり、干支紀年と陰陽学説と十干転化、十二支化が五行転化などの学説がある。上述の分析を通じて、『黄帝内経』の中で干支学と深く広く関わっており、上は天文と星宿運行の道理、下は人の体の臓腑の脈絡を知ることができる。病理、生理、診断、具体的な薬品使用及び鍼灸治療などの面でも詳細な記述がある。『黄帝内経』の運氣は唐代の王氷(650年頃～740年頃)以来、千年にわたって発展・運用され、すでに非常に成熟した予防医学の基礎を持っており、ここ20年以來多くの学者が運氣の研究に力を入れている。その理論は十干から五運を推定し、十二支から六氣を推定し、運と氣の間の継承と派生の関係を観察することによってその年の氣候の変化と病の発生を判断し、予防医学を構築しようとしている。ここ10年来、命術がだんだん伝統的な迷信から離れてきたため、四柱学と『黄帝内経』運氣の結合研究に関心を持つ学者が多くなってきてい、もっと詳しくて明確な予防医学の発展を期待している。占星学は四柱推命学と同じ命術学であり、どちらも干支学を理論の基礎としており、そのほか、陰陽五行、時空、人体の五臓六腑などの面での対応はほぼ同じで、演算方式が異なるだけである。しかし、占星学は宇宙と人間の観点で四柱推命より優れる部分があり、それは「宮位」と「星曜」である。例えば、明代の『紫微斗数全書』³⁶⁾中にその演算宮位は12個、主副星曜は130個あると記載しているが、干支学、陰陽五行、時空及び人体臓腑などに合わせれば、四柱推命よりもより詳しい命術演算できる。そのため、筆者は予防医学を占星学の角度から、『黄帝内経』との宇宙と人間の病理関係を探索できれば、おそらく四柱推命学よりも適切になり、体質、予防医学、健康養生、臨床の弁証論治、優育優生観念などにより多くの科学的証拠を提供できると考えている。

注

- 1) 万民英『三命通会』卷一、『四庫全書文淵閣』子部七・術数類五。
- 2) 蔡英傑「十二支的文化説解」『揚州大学学报』2004年第4期、66-70頁。
- 3) 彭邦燭・謝濟・馬季凡『甲骨文合集補編』「合集」37986、北京：国語出版社、1997年。
- 4) 『礼記』曲礼、四部叢刊本。
- 5) 蔡大成「著草神話伝説生態分解」『民間文化論壇』2006年6月第3期。
- 6) 彭邦燭・謝濟・馬季凡『甲骨文合集補編』(以下、『合集』と略す。24225、北京：国語出版社、1997年。
- 7) 『合集』6461正。
- 8) 『合集』36485。
- 9) 『合集』10405。
- 10) 『合集』12870。
- 11) 『合集』36975。
- 12) 『合集』33006。
- 13) 『合集』27815。
- 14) 中国社会科学院考古研究所編『小屯南地甲骨』(屯南)173、北京：中華書局、1980年。
- 15) 馬王堆帛書『経法』四度・第五。
- 16) 範応元『老子道德経古本集注』上海：華東師範大学出版社、2010年。
- 17) 来知徳『周易集注』北京：九州島島出版社、2004年。
- 18) 董仲舒・董慎行『春秋繁露』上海：上海古籍出版社、1991年。
- 19) 潘暘明・趙雲川・李家奇ほか「漢方医における『氣』の客観性」『実用漢方内科雑誌』2022年第4期、36頁。
- 20) 王氷『黄帝内経・素問』宝命全角論編、四部叢刊本。
- 21) 王氷『黄帝内経・靈枢』歳露、四部叢刊本。
- 22) 潘暘明・趙雲川・李家奇ほか「漢方医における『氣』の客観性」『実用漢方内科雑誌』2022年第4期、36頁。
- 23) 李零『中国方術正考』北京：中華書局、2006年、6-11頁。
- 24) 蕭登福『『大正蔵』収録の仏經に見る道教星斗崇拜の仏教への影響』『台中商專学报』1991年第23号。
- 25) 張君房『雲笈七籤』卷二十八「二十八治」『道蔵』第22冊、204頁。
- 26) 盖建民「道教と中国伝統天文学の關係考略」『中国哲学史』2006年第4期、105頁。
- 27) 『三洞神符記』符字、『道蔵』第2冊、1431・144頁。
- 28) 周山『命理哲学批判』『上海社会科学院学术季刊』1995年第1号、99-107頁。
- 29) 李零『中国方術正考』北京：中華書局、2006年、12-14頁。
- 30) 邵冠勇「天干地支及びその医經における応用」『山東中医学院学报』1983年第3期、7頁。
- 31) 王氷『黄帝内経素問』四部叢刊本。
- 32) 潘毅・夏葉平「天干地支の『黄帝内経』における応用分析」『広州中医薬大学学报』2014年第4期、31頁。

- 33) 潘毅・夏葉平「天干地支の『黄帝内経』における応用分析」『広州中医薬大学学報』2014年第4期、31頁。
- 34) 潘毅・夏葉平「天干地支の『黄帝内経』における応用分析」『広州中医薬大学学報』2014年第4期、31頁。
- 35) 印会河『漢方医基礎理論』台北：知音出版社、2013年、40・57頁。
- 36) 陳希夷・羅洪先『紫微斗数全書』、新竹：竹林書局、2016年。

・指導員：名和敏光 山梨県立大学准教授
専門分野：陰陽五行/術数学/占術・方術/医書/馬王堆漢墓帛書

・作者：廖維駿 厦門大学哲学科博士研究生/山梨県立大学研究生
専門分野：道教占星学/術数学/占術/宗教社会学